報告

訪南米ミッションを派遣

――日本メルコスールＥＰＡの早期締結を各国要人に働きかけ

加瀬 豊（かせ ゆたか）
中南米地域委員長
双日特別顧問

日本とメルコスール（南米南部共同市場）諸国とは、長きにわたり友好関係を構築してきた。経済分野では、日本はメルコスールから鉄鉱石等の鉱物資源やニオブ[注1]、リチウム等のレアメタル、トウモロコシ、大豆等の畜産飼料などを輸入する一方、メルコスールに対して、自動車、機械、インフラなどを輸出している。また、様々な業種の日系企業が生産拠点を置くなど、両者は貿易や投資を通じ、強固な互恵関係にある。加えて、日系人コミュニティーを通じた人的つながりは、相互理解と相互交流を支える財産となっている。

日本にとって、人口約3億人、ＧＤＰ2兆ドル超の一大経済圏であるメルコスール諸国との経済関係強化は、最重要かつ喫緊の課題といえる。他方、メルコスール諸国にとっても、ＧＤＰ世界3位の日本市場に対する輸出拡大および高品質な日本製品の輸入促進、日本からの投資拡大という大きな利点が存在している。経団連は長年、そうした重要なパートナーとの経済関係強化に向けて、日本メルコスールＥＰＡの早期実現を訴えてきた。

こうした背景のもと、経団連では、7月9日から12日の日程で、私が団長を務める21人のミッションを、メルコスール加盟国であるパラグアイ、ウルグアイ、アルゼンチンの3カ国に派遣した。現地では、各国の政府要人や経済界に対して、日本メルコスールＥＰＡの早期実現と、各国とのさらなる経済関係の強化を働きかけた。以下はその概要である。

多様性に富む3カ国。国ごとの課題を再認識

最初の訪問国パラグアイは、南米で唯一、台湾との外交関係を有するほか、経済面では農牧畜業と電力が輸出総額の8割以上を占める。主要農産品は大豆、トウモロコシ、コメ、小麦、綿花、マテ茶、ゴマ等であり、とりわけ、日本人移住者が導入し、急成長を遂げた大豆の輸出量は世界3位〈2021年、国際連合食糧農業機関（ＦＡＯ）による〉を誇る。

われわれ一行は、ベニテス大統領（当時。2023年8月に政権交代で退任）や、アリアナ次期副大統領（現副大統領）などと懇談し、日本メルコスールＥＰＡに対する高い関心を確認できた。また、同国では近年、積極的な外資誘致策、低い税率、安価な労働力や電力等を背景に、外国企業の進出が活発化していることが紹介され、日本企業の積極的な進出に期待が寄せられた。さらに、国際的に脱炭素への関心が高まる中、電力の100％を水力発電で賄う同国が、豊富な水力資源を活用して、グリーン水素や肥料、アンモニアの生産・輸出を拡大していく方針であることも印象的であった。

次の訪問国ウルグアイは、民主主義指数[注2]、腐敗認識指数[注3]等で中南米首位であり、成熟した民主主義のもと、堅実なマクロ経済運営を行っている。特にＩＴ分野では、豊富で質の高い労働力を有することに加え、フリーゾーン「ソナ・アメリカ」を設置するなど、世界に開かれた市場として投資誘致に熱心に取り組んでいる。パガニーニ工業エネルギー鉱業大臣との懇談では、食料、ＩＴ、環境・エネルギーなどの分野で、日本企業の進出への期待が表明された。また、日本メルコスールＥＰＡは極めて重要との発言があり、大いに勇気づけられた。

また、われわれは、同国の首都モンテビデオにあるメルコスール本部で、サギエル事務局長と懇談する機会を得た。同事務局長は、日本はメルコスールの重要なパートナーであるが、近年は、貿易・投資相手国としての順位を落としていると指摘し、今後の関係強化に強い期待を表明した。

最後に訪れたアルゼンチンは、ブラジルと並ぶ南米の大国であり、G20メンバーでもある。広大で肥沃な大地は豊富な食料を産出し、大豆、トウモロコシ、小麦等、穀物の主要生産・輸出国となっている。また、鉱物・エネルギー資源の生産・供給国でもあり、特にリチウムは世界有数の埋蔵量を誇る。われわれは、マサ経済大臣、カフィエロ外務大臣、マルコ・デル・ポント大統領府戦略庁長官などと懇談した。先方からは一様に、二国間の経済関係を促進するためにも、日本メルコスールEPAの速やかな締結を働きかけるとの発言があり、大いに意を強くした。また、アルゼンチンはリチウム、銅、天然ガス等の鉱物・エネルギー資源はもとより、風力、水力等の再生可能エネルギーにも恵まれており、電気自動車(EV)などを含め、日本との連携に大きな可能性があることが紹介された。

ベニテス パラグアイ大統領（当時）（左）

マサ アルゼンチン経済大臣（右）

メルコスール諸国との一層の経済関係強化を目指す

本ミッションの最大の成果は、メルコスール各国の政府要人、経済界から、日本メルコスールEPAの早期実現に対する賛意を得られたことである。また、広範な分野における投資機会と今後の連携に高いポテンシャルがあるとの認識で双方が一致したことも大きな収穫であった。

日本は資源に乏しい国であり、とりわけ鉱物・エネルギー資源、食料・飼料など、国民の生活や企業の事業活動に不可欠な物資の多くを海外からの輸入に依存している。メルコスール諸国と日本は、地理的には離れているが、グローバル・バリューチェーンにおける適切なリスクの分散と管理の観点に立てば、天然資源や食料の安定的な供給源として大きな存在感を示すメルコスール諸国との間で、より緊密かつ強固な連携を図ることが今こそ求められている。

また、メルコスール諸国は、環境保全・脱炭素の推進においても重要な役割を果たしている。今回の訪問を通じて、水力、風力、太陽光など豊富な再生可能エネルギーを有し、バイオエタノールやバイオガスの生産と利活用などに先駆的に取り組み、豊富な知見と経験を蓄積していることを改めて実感することができた。

今後とも、メルコスール諸国との経済関係強化に向けて、その制度的基盤としての日本メルコスールEPAの早期締結を目指し、各方面への働きかけを粘り強く継続していきたい。

（注1）ニオブ：レアメタルの一つで、超電導材料などに用いられる

（注2）民主主義指数：英国のエコノミスト・インテリジェンス・ユニット（EIU）研究所が毎年発表している、各国の政治の民主主義の状態を評価する指数。ウルグアイは2022年、8・91で世界11位（日本は8・33で16位）

（注3）腐敗認識指数：国際NGOのトランスペアレンシー・インターナショナルが毎年発表している、政府・政治家等公的部門の腐敗度を評価する指数。指数が高いほど腐敗度が低い。ウルグアイは2022年、指数74で世界14位（日本は73で18位）